

米、栗、小豆……

和菓子の素材を感じる「ういろペーパー」で 自分たちらしくフードロス解決に取り組む



名古屋の食文化として長年愛されている和菓子「ういろう」。伝統的なういろうに新たなアイデアを吹き込んで発展を続ける株式会社大須ういろは、ういろうの製造時に生じる切れ端の活かし方に長年悩んでいました。「もっと、自分たちの価値観に合うフードロス削減方法はないか…」。模索を続ける中で出会ったのが、さまざまな素材を混ぜ込んでつくる※「混抄紙(こんしょうし)」でした。今回は、ういろうの「はしっこ」を混ぜ込んだ混抄紙「ういろペーパー」誕生と活用に関わった4社に集まっていただけ、「ういろペーパー」に込められた想いやその製造過程のエピソード、そして「ういろペーパー」で実現される未来について語っていただきます。

※混抄紙 紙の原料であるパルプに異質な繊維を混ぜ合わせて抄いた紙のこと
※大須ういろの商品は、以下、「ういろ」と表記します

プロフィール

地域の魅力をつくり、ういろの文化を次世代につなぐ
株式会社大須ういろ 村山 賢祐さん

想い伝わるパッケージで、人と人をつなげていく
富田商店株式会社 富田 純さん

創業以来、紙と共に歩んできた再生紙のスペシャリスト集団
山陽製紙株式会社 長谷川 将之さん

風合い豊かな紙「ファンシーペーパー」をつくり、届け、
持続可能な社会づくりに寄与し、情報社会の中で新たな価値を構築する
平和紙業株式会社 稲垣 智昭

フードロスという長年の課題に、 美を大切にする「大須ういろ」らしく向き合うために

村山：私が「混抄紙」について知ったのは、富田社長に「『ういろの切れ端』というフードロスを削減する良い方法はないだろうか……」と、相談したことがきっかけです。「切れ端の詰め合わせ」のような工場直売品の提供も考えたのですが、当社は「安全安心でおいしく美しいものを」という理念を掲げています。美しさもお客様にお届けしている価値だと考えると、それはできませんでした。

富田：長年「ういろの切れ端」の活かし方に悩み、その時々にはできることを実行してきたが、もっといい方法はないかというご相談でした。大須ういろさんは20年以上前から、環境に配慮したパッケージ以外の提案は受け付けないというほど、環境保全への意識が高い会社。そこで、「村山社長なら、耳を傾けてくれるかもしれない」と、平和紙業の稲垣さんから聞いた「混抄紙」の話をしたんです。「確約はできませんが、ういろを混ぜ込んだ紙をつくれるかもしれない」と伝えました。

村山：廃棄されるういろが紙として生まれ変わり、自社の商品でも活かせるとしたら……こんな良いことはないというのが率直な感想でした。ただ、経営者としてコスト面については悩みましたね。

なんとか決断できたのは、商品の美しさも大切にする「大須ういろ」らしくフードロス削減に向かう姿勢に、多くのお客様が共感してくださるのではと直感したからです。お客様の信頼を獲得し、ファンを増やしていくことは経営的にも重要です。

もうひとつは、「どうせなら、善いことは一番に！」という想いからです。小さな地域の中でもいい、和菓子の中小企業の中でもいい。善いと信じられることには、最初に踏み出そうという社風があり、今回も決断の後押しになりました。さらに、富田さんと稲垣さんの「今、ロスになっているういろを引き取って試作したい。何はともあれやってみませんか」という言葉で腹をくくりました。



多くのお客様に長年愛されている、棹タイプの「ういろ」。

「本当にできる？」ういろを混ぜ込んだ紙づくりで、 混抄率20%を目指す

稲垣：私が混抄紙の可能性を知ったのは、2021年4月。山陽製紙さんが実施されたオンライン勉強会がきっかけです。独特の質感を持つ混抄紙が、600kgほどの小ロットでつくれるのは魅力的でした。

富田：稲垣さんから混抄紙の話聞いたとき、「すごい技術だけど、箱や紙袋に仕立てられる紙になるのか……そもそも、ういろで紙ができるのか？」と、正直、半信半疑なところもありました。でも、ういろでつくられた紙を見たいという気持ちも同時に湧いてきましたね。

長谷川：コロナ禍が長引いて紙業界関係者も危機感を覚え、積極的に情報交換し合っていた時期でしたね。勉強会からしばらくして、稲垣さんから「ういろで紙をつくってみたい」と相談を受けました。山陽製紙には「できない」と即答せず、「できるように考える」という風土があります。ういろという粘り気のある素材を混ぜ込むのは初めてでしたが挑戦を決め、当社研究開発室の橋本が、実験を繰り返してくれました。

村山：混抄紙の品質安定を重視する場合、混抄率（製品重量に対する混ぜ込む素材の重量）は5%程度が一般的と教わりましたが、『ういろペーパー』と名乗るからには、混抄率2割はほしい」と、希望を伝えしました。感覚的な数字で申し訳ないのですが……。

稲垣：そこから、富田さん、長谷川さんとミーティングを数回重ね、混抄率20%を実現するにはどうしたらいいか、色や厚み、混抄の具合など、どんな紙を目指しているのかをクリアにしていきましたね。

長谷川：当社としても、混抄率20%はチャレンジでした。稲垣さんが「できるだけ入れてみて」と言うので混抄率50%の試作品もつくってみましたが、あれは紙ではなかったですね（笑）。強度や美しさを保ちながらも、混抄率20%を達成するまでさらに試作を繰り返しました。
抄造本番には、村山社長も工場までお越しくださり、「ういろペーパー」ができる瞬間を見届けてくださいました。

村山：できたての紙から、自分たちが大事につくってきたういろの存在を感じ、本当にうれしかったです。栗や小豆のつぶ感が美しく、透かしてみると米の透明感も感じます。ちょうど、会社として「人も商品も、自然な味、個性を出していこう」という方針を掲げていたこともあり、同じ模様が二度と現れない紙という点もぴったりだと思いました。



ういろペーパーを光に透かすと栗や小豆のつぶ感、米の部分の透明感が美しい。

稲垣：私も「ういろペーパー」誕生に立ち会わせていただきました。細かなトラブルが発生する中、山陽製紙の社員さんが様々なリスクに備えてくれたおかげで、無事に完成したのだと思います。山陽製紙さんの技術力と責任感に助けられましたね。

村山：そうですね。工場で走り回る社員さんの姿を目にして、ありがたい気持ちになりましたし、一筋縄ではいかないプロジェクトだったのだと改めて実感した一日でした。



バルパーという大きなミキサーにパルプ（再生紙）とういろを入れて攪拌し、繊維をばらばらにほぐします。



その繊維に水を加えて洗い、ゴミなどを除いたら、まんべんなく広げてシート状に。



水分を絞り、6 台の大きなローラー状のアイロンの間を通しながら熱で乾かします。



山陽製紙にとっても、ういろのような「粘り気」のある素材は初挑戦。熱を加える製紙工程で、この粘り気が糊のようにひっついてしまうという懸念もあったが、アイロンへの付着もなく無事に完成。

富田：「ういろペーパー」を触った瞬間、パッケージをつくる立場として「これならいける」と感じました。上品な雰囲気を際立たせたいと、イメージが膨らみました。

長谷川：4社で一緒になって環境に配慮した紙をつくりあげ、完成を喜びあえた。頑張ってよかったなと実感します。

紙はできてからがスタートライン。

「ういろペーパー」でつないでいくお客様との絆

稲垣：今、「ういろペーパー」は、大須ういろの定番商品「棹ういろ」の2本・3本入りの箱に使われています。デザイナーさんからの反響も大きく、その美しさと「混抄率 20%」にみなさん驚かれます。当社の営業にも問い合わせが増えてきています。

富田：包装資材メーカーの方も「めちゃくちゃいいですね!」と関心を寄せてくれます。ただ、実現には関係者全員が同じ目標に向かい、順調にできなかった場合の責任所在も明確にしなければなりません。チームで新しいものを創り上げる難しさがわかっているからこそ、「憧れますが、よく形にできましたね」という反応も同時にいただくことが多いです。

村山：中小企業の場合、社長の意志がそのまま企業姿勢になります。今回は「ういろペーパー」の製造と活用を通して、環境対策やフードロスといった課題に自分たちらしく取り組む姿勢を示そうと決意しました。

しかし、「企業姿勢を示したい」という想いだけでは「ういろペーパー」は形になりません。はじめに相談に乗ってくれた富田さんや、混抄紙の可能性に気づき、その存在を教えてくれた稲垣さん、「トライしてみる」と言ってくれた長谷川さんがいてくれたからこそ実現できたのです。

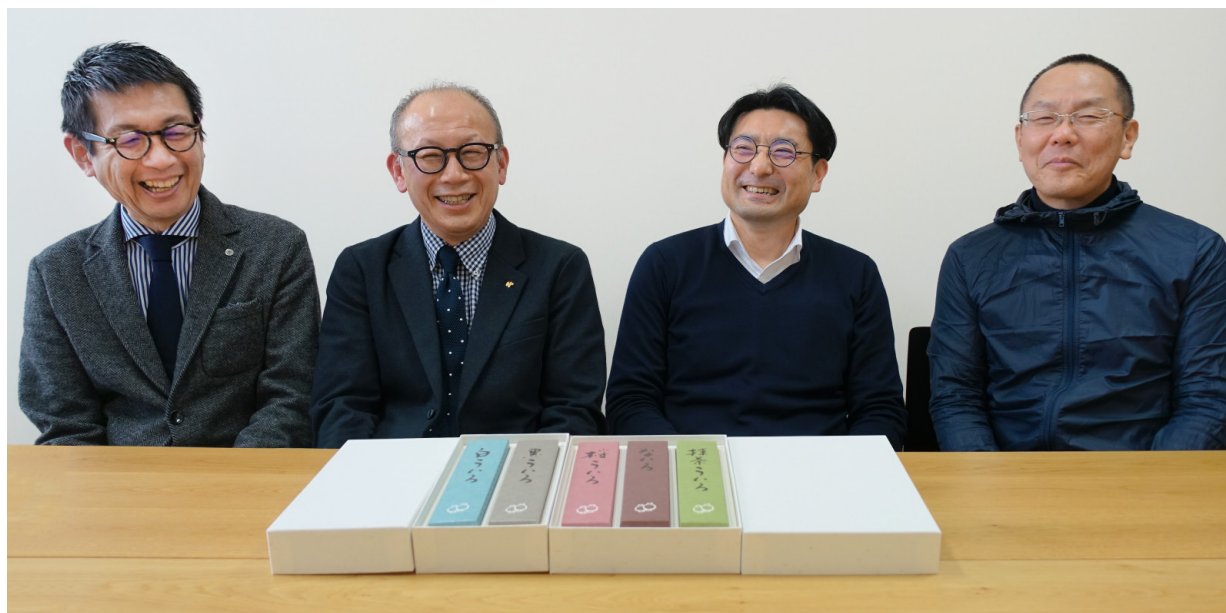
長谷川：経営者として、コストとの折り合いに悩まれた村山社長と同じく、わたしたちも覚悟を決めて抄造に乗り出しました。なんとか形にできたことで、メーカーとしての自信がついた気がしますし、「ういろペーパー」の取材も想像以上に多く、フードロス削減への高い関心を感じています。

村山：プレスリリース発行から約2ヶ月経ちますが、当社も週に2回は取材いただいています。腹をくくったことへのご褒美かもしれません（笑）。

稲垣：人と人とのご縁がつながって生まれた「ういろペーパー」は、大須ういろを始めとした企業の課題を解決できるプロダクトであり、取り組む意味があるプロジェクトだと、関係者全員が信じられたからこそ完成できたのだと思います。

村山：まさに、4社の哲学、想いが織り込まれた紙になりました。このプロジェクトは「ういろペーパー」の完成がゴールではありません。この先、様々な場面で活用する予定なので、ようやくスタートラインに立てたという気持ちです。具体的にはこれからですが、商品のパッケージや、会社の名刺、封筒などに展開し、大須ういろの企業姿勢を示していきたいと思っています。

稲垣：平和紙業も、環境に配慮した紙づくりとその流通に長年取り組んできました。さらに、地域の紙屋として、地域のお役に立ちたいという想いで仕事をしてきました。その理念が形になった「ういろペーパー」が広くお客様のお手元に届いていることが誇らしく、仕事をする上での自信につながっている気がします。今日は、本当にありがとうございました。



山陽製紙 長谷川さん（左） 平和紙業 稲垣 智昭（中央左） 大須ういろ 村山さん（中央右） 富田商店 富田さん（右）